「嘘っぽい」と思われやすい性格はあるのか

○向居 暁

(高松大学発達科学部)

キーワード：欺瞞性認知、性格特性、暗黙の性格観

Relationship between perceived deceptiveness and perceived personality traits

Akira MUKAI

(Faculty of Human Development, Takamatsu University)

Key Words: perceived deceptiveness, personality trait, implicit personality theory

目 的

本当のことを言っているにもかかわらず、発言内容が嘘っぽいと判断されやすい人が存在する。この現象には、その人物がどのような性格と認知されているのかが関与している可能性がある。実際に、欺瞞性認知と関連する性格特性はあるのだろうか。もしあるのなら、どのような性格の人物が嘘っぽいと思われるのだろうか。本研究は、欺瞞性認知と性格特性の関連性について質問紙による仮想場面を用いて検証した。また、それらの関連性において、性差が関与するののかについても検討した。

方 法

被験者 大学生・短大生 384 名 (男性 192 名、女性 192 名、 $M=19.9$ 歳、 $SD=1.21$ 歳、 $range=18-25$ 歳)であった。

材料 <被欺瞞性認知性格> 予備調査の結果は、「話好きな」と「社交性がある」という性格特性が欺瞞性認知と関連していることを示唆した。本研究では、これらを「被欺瞞性認知性格」とし、それぞれと対になる性格の「寡黙な」、および、「社交性がない」を性格変数として用いた。つまり、同じ状況でも「話好きな」人の発言は「寡黙な」人より、また、「社交性がある」人の発言は「社交性がない」人よりも、欺瞞度が高まると仮定した。<会話の場面> 向居 (2011) から、「本の場面」と「服の場面」の 2 場面を選択した。各場面について、被験者が「あなた」として登場するように、また、友人としての女性か男性が登場するように変更された。例えば、本の場面 (登場人物 A が、「話好きな男性」) の場合、『A くんとはあなたは友達同士で、A くんは話好きな男性です』とあり、あなたが A くんの本を薦める際に、あなたの『この本、面白いから読んでみて』という発言に対する、A くん『読んでみる』という発言について欺瞞度が評定された。また、服の場面 (登場人物が、「社交性がある女性」) の場合、「あなたと B さんはとても仲の良い友達で、B さんは社交性がある女性です」とあり、洋服屋であなたが服を試着して、あなたの『この服どう？ 似合ってる？』という発言に対する、B さんの『似合ってる』という発言について欺瞞度が評定された。<欺瞞度尺度> 村井 (1998) の欺瞞度尺度 (4 項目、7 段階評定) を用いた。質問項目には、実験の意図を被験者に気づかせないために 6 項目のフィラー項目を加えた。

手続き 各被験者は、配布された質問紙に記載された 2 場面について評定を行った。性格特性、登場人物性別、場面の提示順序は被験者の性別を考慮した上で、被験者間でカウンターバランスされた。

結果と考察

「本の場面」において、被験者性別 (女・男) × 登場人物性別 (女・男) × 性格特性 (話好きな・寡黙な) の欺瞞度について、3 要因分散分析を行った結果、2 次の交互作用のみが有意であった ($F(1,184)=4.65$, $p<.05$)。下位検定の結果、男性被験者は「話好きな男性」に対して、「寡黙な男性」よりも欺瞞度を高く

評定する傾向にあった。さらに、結果のパターンを考慮し、同じデータについて、同性・異性という観点から分析を行った (表 1)。同性・異性 × 性格特性 (話好きな・寡黙な) の 2 要因分散分析の結果、交互作用が有意であった ($F(1,188)=4.73$, $p<.05$)。下位検定の結果、「話好きな同性」は、「寡黙な同性」よりも欺瞞度が高く評定されたことがわかった。また、「寡黙な異性」は、「話好きな異性」よりも欺瞞度が高く評定される傾向にあった。この結果について、心的距離が遠いと考えられる「寡黙な異性」の場合、欺瞞性認知に関与する「自信のなさ」(工藤・下村, 1997) を発言から感じ取りやすく、逆に、心的距離が近い「話好きな同性」の場合は冗談が言い合える関係であり、発言が冗談っぽく解釈されやすいため、それぞれ欺瞞度が高くなったのではないかと考えられる。

表 1 本の場面における「同性・異性 × 話好きな・寡黙な」ごとの欺瞞度

	性格特性	平均値 (SD)
同性	話好きな	3.87(1.35)
	寡黙な	3.27(1.16)
異性	話好きな	3.50(1.20)
	寡黙な	3.72(1.49)

また、「服の場面」において、被験者性別 (女・男) × 登場人物性別 (女・男) × 性格特性 (社交性がある・ない) の欺瞞度について、3 要因分散分析を行ったところ、登場人物の性別の主効果が有意であり ($F(1,184)=4.04$, $p<.05$)、被験者の性別の主効果が有意傾向であった ($F(1,184)=3.80$, $p=.05$)。つまり、男性登場人物 ($M=3.75$, $SD=1.23$) は、女性登場人物 ($M=3.41$, $SD=1.14$) に比べて、欺瞞度が高く評定された。また、男性被験者の欺瞞度 ($M=3.74$, $SD=1.13$) は、女性被験者の欺瞞度 ($M=3.41$, $SD=1.23$) とくらべて、高く評定される傾向にあった。同じ「服の場面」において「話好きな・寡黙な」を操作した場合で有意差が認められなかったことから、「社交性がある・ない」の文脈においてのみ、女性登場人物の欺瞞度が低くなり、女性被験者の欺瞞度が低くなる傾向にあったことがわかる。

本研究結果から、被験者の性別、登場人物の性別、場面や性格特性の違いのような様々な要因が欺瞞性認知に関与していることが示唆された。しかし、多くの交互作用が認められたことからわかるように、その効果のあり方は複雑であり、単純に説明できるものではなかった。さらに、両者とも、「外向性」に属すると考えられる「話好きな」と「社交性がある」という性格特性は、場面や性別などによって欺瞞性に与える影響が異なることがわかった。今後は、このような被欺瞞性認知性格が、ある時には欺瞞度を高め、また別の時には欺瞞度を低めることになる原因を検討する必要があるだろう。

引用文献

向居 暁 (2011). 繰り返し表現と強調語が発言内容の欺瞞性認知に及ぼす影響 日本心理学会第 75 回大会発表論文集, 692.

謝辞

本研究は、著者の指導により行われた田中宏幸さんの卒業論文 (2012 年度・高松大学発達科学部) のデータを再分析、加筆、修正したものである。ここに記して感謝の意を表したい。